

introduction

最近にわかに遠位脛腓靱帯損傷に注目が集まっている。遠位脛腓靱帯損傷は足関節骨折に合併した損傷が一般的で、骨折型により損傷されていることが疑われれば脛腓間をスクリューや suture button など固定される。しかし、骨折を伴わない損傷は high sprain ともいわれ、しばしば見逃され、確定診断するまでに長期間を要することがわかっている。高頻度の回外捻挫による足関節外側靱帯損傷とは反対の受傷機転である回内捻挫で損傷される。受傷後に疼痛が長引くことで発見され、特にアスリートの場合はその間十分なパフォーマンスを出せずに、競技に復帰できないことも多い。足関節外側靱帯損傷の場合は、レベルの高いアスリートでは足関節が少し緩くてもフルパフォーマンスでプレーできることもあるが、遠位脛腓靱帯損傷では少しの緩みでも難しいことがあり、満足なプレーをするためには手術がしばしば必要になる。その意味では遠位脛腓靱帯損傷は、膝関節における前十字靱帯損傷のような存在であると考えているが、1つ異なる点としては、受傷時に適切な保存治療を行えば手術しなくても済む場合もあるということである。そのためにも急性期に見逃さないことが非常に重要である。その診断としては、やはり関節鏡にて不安定性を証明することが gold standard になるが、MRI や超音波などの診断装置の普及により、急性例や陳旧例の区別なく、ほぼ正確な診断が可能になってきた。また、遠位脛腓靱帯の正確な解剖も詳細に検討され、それに対する治療法に関しても生体力学的な研究から最適な方法が提示されている。

本特集では「遠位脛腓靱帯損傷の病態と治療」について、これだけ知っていればすべての病態に対応できることを目標にして、現在活発に研究を進めていただいている先生方に執筆をお願いした。本特集がこれから外傷学やスポーツ医学を勉強しようとしている若い先生はもとより、これまで遠位脛腓靱帯に関して多くをご存じなかったベテランの先生にもお役に立つことを切に願っている。

奈良県立医科大学整形外科
田中康仁